

2015. 6. 9 (火)

希望を共有する

中道基夫

イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と仰いだすだろう。しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」

(ルカによる福音書 13 章 22～30 節)

東から西から、南から北から

先ほどお読みしました聖書の最後に「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。」(13 章 29 節)と書かれています。これは終末、神の国のイメージで、東から西から、北から南から人が集まってきて、神様の宴会の席に着くのだと言われています。あまり現実味のない言葉ですが、「ああ、これはこういうことかな」と感じた経験について少しお話した

いと思います。

今、社会学部では「世界と出会う」と題して、さまざまな先生方や学生からお話を聞いています。この話の準備をしながら、いったい自分は今までどんな国に行ったことがあるか挙げてみました。結構行ったことがあるのですが、韓国、台湾、インドネシア、チェコ、オーストリア、イタリア、スイス、フランス、ドイツ、ベルギー、ルクセンブルグ、スペイン、オランダ、アメリカ、14 カ国です。ただ、ルクセンブルグは 30 分いただけ

で、通っただけの国もあります。ヨーロッパにいましたので車で気軽に諸外国を訪問することができました。

実は、さきほど挙げた国の中でドイツには8年間暮らしていました。ドイツのキリスト教の教会に日本の教会から派遣されて、ドイツの教会で働くという仕事を6年していました。あと2年は、ハイデルベルク大学で神学の勉強をしたわけです。

ドイツの教会では、いろいろな教会に行って日本の教会や、日本のキリスト教の話をしたり、もしくは原爆の話をしたりしました。それから、ちょうどその滞在期間中、1995年に阪神淡路大震災がありましたから、わたしの出身地でもあり、両親が住んでいました神戸の状況などを話すという課題もありました。

そこで出会った人は、訪問した国の数よりも多かったです。先ほど訪問した国の人たちに加えて、南アフリカ、ガーナ、ナイジェリア、トルコ、セルビア、クロアチア、ラトビア、ヨルダン、インド、中国、もっと他にもいたと思うのですが、もうあらゆる国の人たちに出会いました。それがまさに先ほどの「東から西から北から南から人が集まってきて宴会の席に着く」というような経験でした。

ドイツは、外国人世界でそれでいろいろな問題を抱えていました。トルコ人が全人口の10%ぐらい暮らしています。私の娘が行っていた学校では50%以上が外国人でした。その50%以上の外国人は、だいたい55カ国ぐらいから来ているというような状況の中です。ある都会の学校では1クラス24人ぐらいの内、ドイツ人は2人であとの22人は全部外国人だというようなことも聞いて

います。そういう社会の中でのいろいろな人との出会いは、私にとっては「世界と出会う」という経験でした。

魂の宙ぶらりんを求めて

ただ、私自身は、大学時代は関学の神学部で勉強したのですが、高校から大学ぐらいまでは「外国語を話す人は特別な人だ。特別な人だけが外国語を話せるんだ」という、強い確信を持っていました。「私はできない。そんなことができる人は特別な人だ」という思いが、どこかにあったわけです。ですから、私がこのようにドイツで8年も過ごしたということに、びっくりする人もいると思います。

ただ、大学を卒業して教会で牧師として働く中で「どのようにしたら、自分の殻というか自分の限界というか、自分の境界線を、越えていくことができるだろうか。自分はここまでしかできないという限界を、どうやって壊すことができるだろうか」ということに大きな憧れがありました。どちらかという引っ込み思案な私は、大学の時でも「韓国で、日本の学生と韓国の学生との交流会、いろいろな話し合いの機会があるけど、あなた行きませんか?」と言われても、もう外国なんて怖いと思っていましたから「いや、ちょっと用事がありまして」と断っていたぐらいです。でも、その殻をどう越えていくのかということが、私の一つのテーマであったわけです。

そのような時に、千葉敦子さんというジャーナリストが書いた『ニューヨークでガンと生きる』という本と出会いました。この女性が、ガンになるのです。多くの人は、ガンに

なると家族に面倒を見てもらって、よく知った日本の病院に行って治療をしますけれども、この人はあえてニューヨークに行きます。あまり英語もできないのですが、あえてニューヨークに行ってガン治療を受けるという選択をするわけです。

この人をニューヨークへと押し出した言葉が、犬養道子さんという人の『マーチン街日記』という本に書かれている「精神の安定から離れて、魂の宙ぶらりんの状態に縋り帰っていこう」という言葉です。精神の安定（慣れ親しんだ家族、親しい友達、親しいサークル、学校）にいと安定しますよね。何となく落ち着いて、安心もできます。でも、そこから離れて、魂が宙ぶらりんになるような不安定な状態へ、縋り帰って行こう、そうしなければ精神が活性化していかないというのが、犬養道子さんの言葉です。この言葉に出会った千葉さんは、ガンになったのですから、安定した、落ち着いて安心が得られる家族の元や日本にいたらいのに、精神の安定から離れて、あえて宙ぶらりんの状況になるニューヨークへ行くわけです。

やはり、私も、千葉さんの本やこの犬養道子さんの言葉に出会って、「いつか、安定し、毎日同じようなことを繰り返しているところから飛び出して行って、何も通じない世界へ行って、また宙ぶらりんの状態へ行きたい。そしてまたそこが安定する状態へとなったならば、またそこから飛び出していきたい。そのような運動を繰り返していきたい」と思ったわけです。そのような思いでドイツに行きました。

異文化コミュニケーションの難しさ

しかしというか、案の定というか、ドイツで経験したのが、全くの無力感です。日本にいる時には、教会の牧師や幼稚園の園長もしていましたから、どちらかという人を助ける側の人間です。困っている人がいたら助けて、お世話をする立場にいました。しかし、ドイツに行ったらもう全くの無力になってしまって、いろいろなことができなくなってしまいました。

最初のうちは、パン屋に行って買物することすら簡単にはいきません。ドイツのパン屋では「これを幾つ、これを幾つ」というふうに頼んでいくわけです。自分で取ってきて「はい」とレジに渡すのではなく、対話しなければパンを買えません。

いくつかがパンを買いたいと思いながら、まず「このパン2つ」と言うと「はい」と言って小さな袋を取ってパンを2つ入れてくれます。まだまだ注文したいので、「それと、これを2つ」と言うと、店員がちょっと険しい顔をして小さい袋から先ほどの二つのパンをパッと出して、また中ぐらいの袋を出してきて4つ詰めます。そしてまた「これを2つ」と言うと、もっと大きな袋を出してきて、また詰め替えます。それはイントネーションの問題で、あと幾つか買うかということ表現しなければならないのです。その点がうまく言えないので「これを2つ」と言うと「これが2つだな」と思われます。「もう2つ」と言うと「もう2つだな」と思われます。そしてまた「もう2つ」と言うと「もう、幾つなんだ」とちょっと怒った顔でにらまれるわけです。パンを買うのになぜこんなに怒られなければならないのかと思う

ような経験でした。

面白かったのはマクドナルドでの経験です。「マクドナルドぐらいだったら、問題なく買えるだろう」と思って行きました。どこに行ってもシステムは一緒です。でも日本人と外国人の「物の数え方」が違うのです。例えば「ハンバーガー、2つ」と自分で確認するために、広げた手の指を自分の方に向けて2本折ると、相手には3本の立っている指が見えているわけです。それで店員が、「3つか？」と言うので「いや、2つだ」と答えます。そして「それとピックマックを1つ」と言って、もう一本指を折ると「2つか？」と言って「いやいや、1つだ」と言い返すこととなります。すると、もう怒り出してレジをガーッと反転させて、「これでいいか」とか言われて、マクドナルドで怒られるという情けなさを感じました。

助ける側から助けられる側へ

そのような中で、助ける側から、助けられる側になって、本当にいろいろなことを見えてきました。「助ける側から、助けられる側へ」という経験は、「笑う側から、笑われる側になる」ということでもありました。

皆さんも、漫才師やタレントなどが外国人の物真似をしていると「ああ面白い、上手にやっているな」と思ったりするかもしれませんが、でもやっていることは全部デタラメですよ。デタラメの言葉を大袈裟にそれらしく話しているのを笑っている側が日本ですよ。

今度は、わたしがその笑われる側になりました。ドイツのある小学校に行った時に、先生が「きょうは日本からお客さんが来ていま

す」と言うと、数人が立ち上がって、手を合わせて、それから目を引っ張って細目にして、「シン ション シャン、シン ション シャン」と言うわけです。アジアの言葉、日本語や、アジア人のしぐさや目が細いとかということが、笑われる側になっていきました。

今まで自分は日本で笑う側でいた時に何を笑っていたのか、どのようなことを面白がっていたのか、その笑われている人たちはいったいどのように思っていたのだろうかということが、自分の問題として迫ってきたわけです。そのような経験を通して、「世界と出会う」ということは、違う景色や言葉や文化に出会うということではなく、自分の中にある今まで見えていなかったこと、今まで気が付かなかったことが見えるようになることだと気付いてきました。またそういう経験が真に人と人とを結びあわせていくのです。

希望の共有

今はスマホやコンピュータが世界の入口のようなもので、のぞき穴のようにしているいろいろなことが見えます。みなさんも今、海外でどのようなことが起こっているかということをおタイムで見ることができます。しかし、人と人とがつながり合って、そこにいる人たちと一緒に働くということは、それほど簡単なことではありません。インターネットではできない経験というものが、この世界の中にはあると思います。それは単に、見たとか、食べたとか、行ったということではない経験です。そのような経験を一瞬にして可能にしてくれるものが、世の中にはあるということをお皆さんにも知ってほしいのです。

それは例えば、私の場合はキリスト教です。クリスチャンというのは世界で22億人います。私が「日本にからきた牧師です」と言うとドイツの教会で説教をできるのです。そして一瞬にして通じ合える、一瞬にして一つのものに向かっていくことができるのです。それはバックパッカーで行った旅行者には絶対にできないことです。どんなにその人のドイツ語の能力が高かったとしても、できないわけです。

それから、キリスト教の団体ということですが、私がかつて関わっているYMCAというものがあります。このYMCAというのは、119の国の中の地域にあり、およそ5,800万人の人が会員です。こういう団体に属して、そこを通じて世界の人たちと出会うときに、一瞬にしてつながりが生まれてくることがあります。それは単に組織や所属の問題ではなく、ミッション、希望を共有しているということだと思のです。

このような言葉があります。「希望が希望として人々に共有されるとき、それは未だないが『存在』するものとして、私たちの現実となり得る。その意味で希望は社会を変革す

る原動力となる」

ちょっと難しいですね。例えば、みなさんや私が「このような社会になるといいよね」という希望を持っていたとしても、その希望が表現されて、みなさんも「そうだよ。そういう希望を持っているよね」とみんなで共有されたときに、今まではそのような希望などというものにはなかったのが、ここに存在するものになります。そして、それが現実になって、「そういう社会をつくらうよ」という社会を変革する原動力になってくるのだというのです。ちょっと難しい言葉ですが、頭の中に入れてほしいのです。

希望や、ミッション、使命というものを共有できる人たちが、この世界の中にはいます。そのようなものを持つということが、皆さんにとって世界に通じる大きな入口なのではないかと私は思います。ぜひそのような経験を、またそのような希望を持って、それを分かち合う人との出会いを探してほしいと願っています。

(神学部教授・

2015年度春学期宗教主事代行)